

令和6年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月14日実施)	総合評価（3月27日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①共生社会の実現にむけて、授業改善を中心とした教育活動を推進して課題解決力を育むとともに、個に応じた学習機会の拡大を促す。 ②部活動、生徒会活動を活性化させ、生徒の自主性、主体性を育む。	①確かな学力育成のために、個に応じた授業実践を行い、基礎学力の定着を図る。「学びなおし」の視点で生徒が達成感を感じられる授業を実践する。インクルーシブ教育を実践し、個に応じた学習指導を行う。 ②生徒会行事の活性化を図り、引き続き生徒の主体的な活動を支援する。部活動では生徒の自主性、主体性を育み、活動状況を校内外に発信し部活動を活性化させる。	①・習熟度別授業や補習により、個別最適な指導を実施する。 ・ICTを効果的に活用して生徒の学習意欲を向上させ、わかりやすい授業を実践する。ICT活用法やTTによる授業実践に関する校内研修を通して、実践力を身に付ける。 ・不登校生徒への対応を強化し、誰一人取り残されない学びの保障に取り組む。 ②・生徒主体の企画運営に向け指導助言を行い、生徒が達成感や充実感を獲得できるよう支援する。 ・部活動見学を実施し、部活動への積極的な参加を促す。各部の活動状況や大会結果等をホームページ等で校内外に発信し、部活動や学校生活の活性化を図る。	①・「生徒による授業評価」の結果により、個別最適な指導ができたか。 ・個人の多様性に合わせて着実な学びを促進することができたか。 ・ICTを活用した授業が増加したか。 ・インクルーシブ教育を実践し、TTによるわかりやすい授業や個別のニーズに配慮した学習指導を実践したか。 ・不登校生徒に丁寧に対応することができたか。 ②・生徒会行事や部活動を通して、生徒の主体性を育成し、人間力を高め、達成感や充実感を獲得できたか。 ・部活動の活動状況をホームページ等で積極的に発信することができたか。 ・部活動加入率を向上させたか。	①・「生徒による授業評価」の結果、今年度もほぼ全ての教科で8割以上の生徒が質問に対して当てはまると回答しており、個別最適な指導を推進することができた。 ・大型電子黒板の導入や校内研修等によりICTを活用した授業を増やすことができた。 ・特別募集生徒に、個別計画を活用し、個別のニーズに配慮した学習指導を実践することができた。 ・不登校生徒には、丁寧に対応を行い、必要に応じ「多様な学習ニーズに対応した柔軟で質の高い学び」を活用することができた。 ②・生徒会行事や部活動を支援した結果、生徒が主体的に学校生活に取り組む態度、達成感や充実感を向上させることができた。 ・各部活に依頼し、ホームページ、学校説明会等で本校の活躍を中学生等に周知させることができた。 ・部活動加入率は横ばいであった。	①・インクルーシブ教育特別募集の生徒や不登校生徒を含め、生徒個々の学習の習熟度の差がとても大きいので、これまで以上に工夫し、個に応じた学習指導を行っていく必要がある。 ・よりわかりやすい授業の実践に向け、よりよいICTやTTの活用法を検討していく。 ②・生徒会、部活動に熱心な生徒については自己肯定感が高められるのに対し、まったく参加していない生徒に対しての支援が検討課題である。 ・情報発信だけでなく、見学をしてもらう機会を増やすことで、部活動への前向きな機運が高めされる。	・生徒個々の学びなおしに対する希望に対して、きめ細やかな教育を実践していることがわかった。一方で、個別のニーズへの対応は、教員の時間と労力を要することが推察される。教員の負担軽減にも目を向け、現場で必要とされるサポートニーズを精査することで、より効果的で質の高い教育の実践につなげることが期待できる。 ・生徒会活動や部活動が、生徒の自主性・主体性の高まりのみならず、自己効力の向上に影響を与えたことが、本報告から確認することができた。「できる・わかる」といった体験は、例えば、チャレンジすることへの積極性を向上させることが知られている。生徒の自己効力感にも着目した指導・支援を、今後も引き続き取り組んでいただきたい。	①・教員が「わかる授業」が行い、生徒が「学ぶ喜び」を得ることは大切であり、アンケートで8割以上が肯定的に回答しているので、授業改善の成果が表れていると考えられる。今後も、個別最適な指導を継続して行う必要がある。 ・インクルーシブ教育実践に向けて、念入りに事前準備を行い、目標達成に向けて円滑に実施できた。今後、どのような成果が生徒にもたらされるのか期待されているため、今後も、「共生社会」の実現に向けて、生徒一人ひとりへのきめ細やかな対応を継続して取り組む必要がある。 ②・生徒会行事は生徒が協力し、自らの手で盛り上げて成功させようと活動していた。 ・部活動に参加しない生徒のニーズをどのように汲み取るかが今後の課題である。	①・引き続き、「確かな学力育成推進校」として、「学びなおし」の視点で、生徒が達成感を感じられる授業を実践するための授業研修を行う。 ・大型電子黒板やICTを活用した授業研修を行い、生徒がより分かりやすい授業を実践していく。 ・TTの活用法の研修等を行い、個に応じた学習指導を充実させる。 ②・部活動の活動状況をホームページや学校説明会等で積極的に発信し、学校生活の活性化を図る。 ・学校行事や教育活動を通して、生徒の自己効力感を向上させる指導・支援を行う。
2	(幼児・児童)生徒指導・支援	①基本的な生活習慣を確立し、ルールやマナーを自発的に守る生徒の育成を図る。 ②多様な生徒に対してそれぞれの課題に応じた支援体制を構築する。	①規律意識の醸成を図り、問題行動の未然防止に取り組み、生徒の自律を促す。 ②・きめ細やかな生徒指導・支援と生徒把握に努め、諸問題の未然防止を図るとともに、課題解決のために全職員で協力して対応する。 ・多様な生徒に対応するため、より一層精力的にSC、SSW、SMや学校外の教育機関と連携して教育相談体制を充実させる。	①教職員間で生徒の情報共有を密に行い、生徒への積極的な働きかけにより、規律意識を高め、生徒の自律を促す。 ②・生徒へのこまめな声かけや面談を通して心身の変化に気づき、困り感を聞き取る等、速やかな課題解決を図る。 ・担任、学年、SC、SSW、SM、相談コーディネーターとともに外部機関との連携を深め、生徒一人ひとりの課題に対応し、ケース会議を開く等、組織的な支援を行う。 ・共生社会の実現に向けて校内のUD化を図る。	①・特別指導、学年指導、近隣からの苦情に迅速に対応することができたか。 ・登下校時や自転車利用のマナー向上が見られたか。 ・生徒の自律性の向上が見られたか。 ②・SC、SSW、SMと生徒、保護者との面談回数が増加したか。 ・外部の相談機関等と連携し、効果的な生徒支援ができたか。 ・ケース会議を適切に開催し迅速に対応できたか。 ・校内のUD化を促進できたか。	①・各学年において、一人ひとりの生徒の状況に応じて丁寧に指導したことなどにより、特別指導の件数は減少した。 ・交通ルールやマナー向上のため、登下校時の巡回を行ったが、モラルの定着のため根気強い指導が必要である。 ②・かながわ子どもサポートドッグによるプッシュ型面談を活用したことなどにより、支援の必要な生徒をSCやSSWにつなげることができた。 ・一人ひとりの生徒の課題に対して、生徒に関わる教職員で情報共有し、具体的な支援や配慮について検討し対応することができた。	①生徒指導において、生徒に注意するだけではなく、支援の観点から一人ひとりの生徒の状況を十分に理解したうえで、生徒との対話を心がける。 ②生徒からの相談やアンケートなどから、困難を抱える生徒を把握し、関係の教職員・SC・SSWと情報共有を行い、ケース会議で支援方策を検討し、必要に応じて、医療や福祉などの外部機関につなげていける体制づくりをより一層進める。	・規律意識の醸成に向けた粘り強い指導・支援の実践がなされていることがわかった。高等学校時期に、道徳性や向社会性をより発達させ、社会秩序の普遍性に照らした生活を営むことができるよう、引き続き、ご尽力いただきたい。 ・多様な課題を抱える生徒に対する支援の充実が図られていることが、本報告から確認することができた。昨今の日本の経済情勢を鑑みると、菅高等学校での取り組みは非常に有用であり、各課題に対処可能な専門家との連携した取り組みが、より一層重要となるだろう。	①・ルールやマナーを守らせることは社会全体の課題であり、高校の役割は大きい。今後も継続して、モラルの定着に向けて指導を行う必要がある。 ・道路交通法の改定に伴い、登下校時の自転車指導を強化する必要がある。 ②・SCやSSW、外部機関と連携を図りながら、様々な課題を抱える生徒の支援を行った。 ・今後も「プッシュ型面談」等を行い、生徒一人ひとりの特性を見極め、丁寧に対応していく必要がある。	①・地域と連携を図りながら、社会人としての礼儀やマナー教育に取り組む。 ・交通安全教室等を行い、自転車の乗り方や危険性を理解させ、登下校時のマナーの啓発活動を行う。 ②生徒が充実した学校生活を送れるよう、引き続き、一人ひとりの生徒の課題に応じた支援を行っていく。

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月14日実施)	総合評価（3月27日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	①一人ひとりのキャリア発達のために、社会的・職業的自立に向けて、必要な基盤となる能力や態度を育てる。 ②自己理解の深化と自己受容や勤労感、職業観の確立を目指し、進路指導の充実を図る。	①生徒一人ひとりが自らの良さに気づくとともに資質・能力を伸ばし、個々の適正に合った進路実現ができるよう細やかな進路指導・支援を行う。 ②インクルーシブ教育実践推進校として、生徒の進路実現に向け、計画的な情報提供と進路支援を行う。	①・「総合的な探究の時間」を通して自己理解や課題解決力を育む。 ・ガイダンス機能を充実させ、生徒が多様な生き方やあり方を考え、将来の進路選択につながる指導を行う。 ・外部模試等を活用して生徒が学習成果を振り返り、上級学校等へ進学する学力を身につけられるよう支援する。 ②インターンシップ受け入れ事業所を開拓し、キャリア教育や進路選択につなげる体制を整備する。	①・「総合的な探究の時間」を目標と計画に基づき実施できたか。 ・進路面談や学年集会等の中で、情報提供するとともに社会や世界の変化を意識した指導ができたか。 ②受け入れ先の事業所を開拓し、キャリア教育の支援体制を整えることができたか。	①・三者面談や進路集会等を計画的に実施し、進路情報へのアクセス方法や情報収集の仕方など、個別・具体的に指導した。 ・就職活動や学校推薦型選抜等について、担任や学年の協力のもと、生徒の進路希望を尊重しつつ、保護者の意見を確認することにより、きめ細かな進路支援につなげた。 ②・事業所見学や会社訪問、職業体験など職業的自立等に向け支援するとともに、生徒一人ひとりのキャリア・進路意識の醸成が向上した。 ・進路指導・支援における指導技術をグループ内で共有し、問題発見・解決につなげる組織を構築できた。	②社会の急激な変化や進展を意識し、従来の進路指導・支援を見直し、汎用性の高いキャリア教育を検討する。教員の進路指導・支援の技術を高められるようキャリア教育研修等を積極的に活用する。	・生徒自身の学習の積み重ねや自主性の高まりが、キャリアを考えるベースとなり、自己実現に向けて生徒たちが考えている構図がよく理解できた。キャリア教育単体では、生徒の意識は向上しないと考えられ、「できる・わかる」の体験が、外部模試やインターンシップの経験と深く関連すると考える。経済的な課題もあり、指導・支援が簡単でないことは明らかなが、時代に合った先生方の進路指導・支援スキルの向上が、そのカギとなる可能性があることもわかった。引き続き、3年間という生徒の時間を有効活用しながら、ご尽力いただきたい。	①・生徒一人ひとりにきめ細やかに進路指導を行ったが、現在の社会状況や今後の経済状況など、リアルな情報を生徒・保護者に伝えながら進路指導を行う必要がある。 ②生徒が自分の将来を考え主体的に進路選択ができるようになることは、とても重要である。そのための指導に計画的な進路指導を行う必要がある。	①・定期的に三者面談等を行い、生徒・保護者と連携を図りながら、生徒の自己実現に向けた進路支援を丁寧に行う。 ・研修等を利用して、時代に合った教員の進路指導・支援スキルの向上を図る。 ②生徒・保護者に計画的に情報を提供し、一人ひとりに適した進路選択ができるよう支援を行う。
4	地域等との協働	①地域・保護者等との連携・協働を推進し、信頼される学校づくりに取り組む。	①生徒の活動を積極的に発信し、本校の教育活動の理解と信頼される学校づくりを推進する。 ②インクルーシブ教育実践推進校として、説明会等をとおして取り組みを周知する。 ③PTA活動やボランティア活動、また地域との連携・協働をとおして、生徒の社会性を育む。	①ホームページの充実を図り、学校説明会等で本校の魅力、特色を積極的に発信する。 ②インクルーシブ教育について学校説明会やホームページで発信し、地域の関係施設と連携し、進路実現に向けた協力体制を整備する。 ③PTAと連携してボランティア活動や行事の活性化を図り、地域行事への参加を通して地域との交流を深める。	①本校の魅力、特色を適切かつ速やかに広報できたか。 ②・インクルーシブ教育について効果的に広報し関係施設等と連携できたか。 ・PTAと密に連携できたか。 ③地域主催の行事への参加を通して、地域に貢献することができたか。	①夏の学校見学会は、13日間行い、430名の参加があり、10月、11月の学校説明会には、360名、430名の参加があった。参加者のアンケートもよい評価が占められ、適切に広報ができた。 ②HP、中高連携事業を通じてインクルーシブ教育について伝えることができた。 ③・PTAやボランティア生徒とともに、多摩区の自然遊歩道保全活動に参加できた。 ・地域のお祭りや行事に積極的に参加した。	①見学会、説明会の参加者が、志願者につながるように、HPなどの充実を引き続き行う。 ②正しくインクルーシブ教育について理解してもらうために引き続き広報していく必要がある。 ③たくさんの生徒がボランティアに参加できるような方法を考えていく。	・菅高校自体の取り組みやインクルーシブ教育に対する地域の理解が、得られつつあることが理解できた。菅高校で取り組まれている連携・協働事業、取り組んでいない連携・協働事業を精査することで、大学教育が協働できること見えてくるかもしれないと感じた。次年度以降、委員として協議に加わりながら、必要時、菅高校の地域等との協働推進に携わっていきたい。	①計画的に学校説明会や見学会を実施し、学校概要や生徒の活動、インクルーシブ教育実践推進校のアピールをすることができた。 ・生徒が地域の行事に参加することで、地域理解が深めるため、今後も交流を深めていく。 ・近隣の施設と連携を図り、生徒の状況やインクルーシブ教育についての理解を求めていく。 ・PTAと連携を図りながら、生徒が地域のボランティア活動に参加することができた。	①より分かりやすくHPを充実させ、本校の特色を積極的に発信していく。 ②学校の情報発信の手段を見直し、インクルーシブ教育への理解を深める工夫をする。 ③PTAと連携を図りながら生徒のボランティア活動への参加の機会を増やしていく。
5	学校管理 学校運営	①学校運営に関して保護者や地域住民等の意向を反映して協力を得るとともに、学校安全管理を組織的に推進する。 ②事故・不祥事防止対策を徹底する。 ③働き方改革、ICT利活用等により教育環境の整備を進め、円滑な学校運営を実施する。	①研修等で生徒、職員の防災意識をさらに高め、地域と連携した防災訓練を通じ、防災体制を構築する。 ②・成績処理や個人情報扱い、体罰等による事故・不祥事防止を徹底する。 ・私費会計処理を計画的かつ適切に行う。 ③・教育活動全般でのICT活用と学校運営の情報化を図ることにより、業務改善と働き方改革を進める。 ・業務の見直しを図り、スクラップ＆ビルドを進める。	①危機管理等マニュアルを見直し、地域と連携した防災訓練を行い、組織的な防災体制を整える。 ②・教務内規、成績処理マニュアル等に基づいて、業務を行うとともに、複数による点検を徹底する。 ・財務事務調査指導結果を職員間で共有し業務改善する。 ③・ICT活用に関する研修を複数回実施し、教育活動や業務の情報化を進める。 ・必要のない業務について積極的に提案し、業務削減を図る。	①危機管理等マニュアルを見直し、共有できたか。 ②・入選業務や成績処理で効率化を進め、無事故を達成できたか。 ・適正な収支管理が行われていたか。 ③・ICT活用に関する研修を実施したか。 ・情報化推進により、教育活動や学校運営の効率化を図り、必要のない業務が削減できたか。	①危機管理等マニュアルを見直し、各種防災訓練等を通して情報の共有を行うことができた。 ②・入選業務や成績処理は、無事故を達成できた。 ・私費については、年間を通し、適切な執行を行うことができた。 ③電子黒板を導入後に電子黒板の効果的な使い方の研修を行い、「確かな学び」の向上につながった。	①今後も情報の更新に努め、各種訓練に生かしていく。 ②・今後も手順の確認や点検等を怠らず、入選業務や成績処理においてミスが起きないように徹底する。 ・会計処理においては、今後も迅速で適切な執行を目指す。 ③ICT活用に必要な研修があれば、積極的に研修会を開いていく。	・生徒への指導・支援と並行して、学校運営上のさまざまな課題解決を図っていることがよくわかった。行政上の課題が山積し、管理職を含め、現場の教員たちの負担がなかなか低減されない現状ではあるが、生徒たちの安全・安心した学校生活に向けて、引き続き、ご尽力いただきたい。	①土砂災害警戒地区にあたるので、近隣の学校や施設と、今後の災害に向けて連携を図る必要がある。 ②入学者選抜業務や成績処理等においては、事前の作業手順の確認を徹底し、事故防止に努めることができた。 ③チームスやICT活用を促進し、会議や会議資料を減らすことで、業務改善を進めることができた。	①災害時における危険を認識し、日常的な備えを行う。また、危機管理マニュアル等の見直しを図る ②入学者選抜業務や成績処理等においては、事前の作業手順の確認を徹底し、事故防止に努めることができた。 ③引き続き、業務の見直しとスクラップ＆ビルドを進め、働き方改革に努める。